ヤマトの頭にも耳がついている。ただし春海のものとは違う、三角に尖った形だ。
「冗談などではない。残念ながらな」
ヤマトがそう言う声が聞こえた途端反射的に彼は耳を塞いでいた。だが兎の耳は形だけでなくちゃんと耳としての機能もあるようで、声は変わらず聞こえてくる。そんな彼を見つめてヤマトは得心したように頷いた。
「きみもか……とりあえず座れ」
言われて春海はヤマトから一番遠い席に座った。普段なら隣に来いと言うヤマトが黙ったままだったから、彼もまた冷静そうな見た目より焦っているのかもしれない。
むっすりと黙ったままのヤマトに代わって口を開いたのはフミだった。
「三都市のタワーの数値は全て想定通り。とりあえず結界を張り直す術は成功したって事。皆お疲れ様。それで……まあアンタ達が今一番知りたいのって当然これの事だろうけど、正直アタシもびっくりしてるだけでまだ何も解らないから」
ヤマトの耳を指さして言った。彼は黙ったまま春海のほうを見つめていた。
「おそらく強大な術を使った反動で起こった事故のようなものと思われるが、なにぶん前例のない事で対処法は不明だ。新田、きみは見た限り変化はないようだが身体に違和感は？」
「えっと、ちょっと疲れてます。でも変な感じはしません」
マコトに訊かれたイオが慌てて答える。
「そうか。あれだけの術を使ってちょっととは心強い。だが三人のうち二人がこのような異常をきたしている。柳谷にこちらに来るよう伝えてあるので、到着次第きみも二人と一緒に徹底的な健康診断を受けてもらう」
「はい」
「サポートについた者達は問題ないと思うが、何か健康に不安があればすぐに申し出てくれ。今後の事については後程連絡する」
会議はすぐに解散となった。本当はヤマトは先日春海に話した長期的な展望について皆にも伝えるつもりだったかもしれない。だが元々会議の名目としては結界の完成と術者の無事を確認するのが目的だったから、異常があると解った時点で対処に切り替えたのだろう。だいたいこの姿を何とかしない事にはヤマトも春海もあまり人目につく場所に出られない。
参加していたメンバーがそれぞれ立ちあがり部屋を出ていこうとする。最後まで座っていた春海にヤマトが近づいた。同じ場所へ検査に行くのだから同行しようというつもりなのだろうが、春海はそれどころではない。

「ふむ、お前は兎か。見た目に解りやすいな」
「……あの、ヤマト、先に行っててほしいんだけど」
「何故だ？　本日きみの予定はもうないはずだろう」
答えに詰まった彼を救ったのはロナウドだった。
「そうだ、さっき渡しそびれた飲み物だ。春海くん、コーヒーと紅茶どっちが良い？　好きなほうを取っていいぞ」
「えっと……じゃあコーヒーを。……ヤマト。俺さ、オトメさんのところにはこれ飲んで休憩してから行くよ」
そう言うとヤマトは黙ったまま彼をじっと見据えた。居心地の悪い視線から目を逸らすが、見つめられていると感じる事に変わりなかった。
「いやしかし、彼にいきなり耳が生えた時は驚いたが、峰津院も同じ状態だったとはな。不幸中の幸いというか、まあ良かったな。これなら彼の心理的な負担も減るというものだ」
ロナウドはぎこちない空気に気づいて二人の間に入ったのだろうが、いきなりそう言われても二人とも返す言葉がない。
「……だからといって、良かったという言い方はないだろう」
二人の代わりに言い返したのはマコトだった。
「友と分けあえば苦難は半分になるというものだ」
「そもそもこの事態が苦難と決まったわけでは……まあいい。栗木、こちらに来たならついでに手伝ってほしい事があるのだが」
不毛な言いあいを終わらせたくなったのか本当に手伝ってほしいのかマコトの言葉からは判断がつかなかった。
「別に構わないが、何だ？」
「資料を見せる。それを飲み終わったら来てほしい」
ロナウドが頷きながら紅茶の缶を開けた。春海もコーヒーに口をつける。それを見遣ったヤマトは、マコトが踵を返すのについてそのまま出ていった。
「どうした？　まさか耳だけでなく体調もおかしくなっているのか？」
春海は首を振った。だがその態度はロナウドに心配させるのに十分だったようだ。先程から震えも止まらず顔色はどんどん青白くなっていくのだから無理もない。
「平気だよ。これからオトメさんに診てもらうんだから」
「それもそうか。今日は大変だったからな。しっかり休んで英気を養うといい」
どうにか頷いた。少し休み、オトメが健康診断の準備を終えたであろう頃合になってから立ちあがる。
今は出来るだけぎりぎりまでヤマトに会いたくなかった。
理由は解らない。ただ、耳の生えたヤマトを見た瞬間に恐ろしくてたまらなくなり、近づかれれば震えがとま